

幼児教育と小学校教育の接続

第1学年 生活科の授業改善

生活科研究会議

研究員 戸崎 恵（川崎市立下平間小学校）

竹井 浩美（川崎市立平間小学校）

大坂 匡弘（川崎市立稲田小学校）

担当係長 伊藤 香緒里

指導主事 中西 憲子

I 主題設定の理由

幼児期の教育（幼稚園、保育所、認定こども園における教育）と小学校教育は、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保することが求められている。同時に、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることは、極めて重要である。幼小接続の重要性に鑑み、平成19年の学校教育法改正において、幼稚園教育の目的として、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」ことが明記されるとともに、平成21年度から全面実施された保育所保育指針、幼稚園教育要領や平成23年度から全面実施される小学校学習指導要領において、幼小接続に関して相互に留意する旨が規定された。

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議は、「幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を『接続期』というつながりとして捉えること」を提唱している。小学校第1学年は「接続期」において重要な時期であり、その中で生活科は、小学校に入学した子どもたちの学校生活への適応を進める中核を担っている。具体的な体験を重視した生活科は、幼児教育における遊びの要素を含んだ教科であり、幼児教育との接続を図る上での役割は大きい。生活科研究会議では、小学校入学時に幼児教育との接続を意識したカリキュラムを編成すること、幼児教育との関連を意識した指導の工夫を行うことは、生活科の授業改善に資すると考え、本主題を設定した。

II 研究の内容

幼児教育と小学校教育との接続の在り方を「スタートカリキュラムの作成」「合科・関連的な指導」「幼小の交流」の3点から考え、第1学年生活科の授業改善に取り組んだ。研究の成果は、授業レベルで活用できるような事例集としてまとめ、市内小学校に配付する。また、研究員が中心となって、川崎市小学校生活科教育研究会常任委員会及びその運営する地区での学習会等で発信していく。

1 スタートカリキュラムの作成

(1) スタートカリキュラムとは

小学校学習指導要領解説生活編（平成20年8月）の「生活科改訂の要点」には、「幼児教育との接続の観点から幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科等との関連を図る指導は引き続き重要であり、特に、学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした。」と示されている。

小学校入学当初は、学校生活を送る上で必要とされる習慣や行動様式を身に付け、学校生活への適応を図る大切な時期である。一方で「小1プロブレム」など学校生活への適応を図ることが難しい子どもの実態もあることから、幼児期の教育における学びの形態を踏まえ、小学校への適応やそこでの人間関係づくりなどが円滑に行われるようなスタートカリキュラムを編成することが求められている。

(2) スタートカリキュラム作成の視点

研究員（1年生担任）の4月の週案の分析を行い、スタートカリキュラム作成の視点を次のように整理した。

- ① 保育園・幼稚園での学び方や指導を生かす
- ② 合科的・関連的な指導
- ③ 授業時数の適切な割り振り
- ④ 学習環境の工夫
- ⑤ 保育園や幼稚園の先生との連携
- ⑥ 職員全体の共通理解

視点をもとに、「大単元を中心にしたスタートカリキュラム」「新しい環境への適応をめざしたスタートカリキュラム」の2事例を作成した。スタートカリキュラムは、教師の指導のしやすさのために作成されるものではない。子どもが新しい環境の中で自信をもち、「明日も学校に行きたい」という意欲をかき立てられるものであることが望まれる。

2 合科・関連的な指導

生活科の学習は、教科の性格上、国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連が深く、低学年教育全体を視野に入れて、関連を図りながら進めていくことが求められている。子どもの意識に沿って充実した活動を展開するためにも、合科・関連的な指導に積極的に取り組んでいく必要がある。

(1) 合科的な指導

合科的な指導は、幼児教育での遊びを通した総合的な指導と重なる部分が多い。特に、入学当初は、合科的な大単元から徐々に各教科に分化していくことが効果的であると考えられる。合科的な指導の長所は、子どもが思いや願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進めていくことにある。1単位時間の中に複数の教科のねらいを盛り込むことで、活動を窮屈にしまわぬように配慮する必要がある。（図1点線四角枠 図2参照）

(2) 関連的な指導

生活科を中心としたカリキュラム編成を工夫するときを考えられるのが、生活科の学習成果を他教科等の学習に生かしたり、他教科等の学習成果を生活科の学習に生かしたりしながら、関連的な指導を行うことである。教科別に行われる授業の中で、子どもの意識を大切にすることは、活動の中から生まれる気付きを次の行動や学習へと発展させることにつながっていく。そのために、学習にストーリー性をもたせたり、必然性を感じさせたりするような配列を工夫するなど、指導の時期や指導方法の関連を考慮することが求められている。

(3) 検証授業「こうえんへいこうよ」

① 単元の目標

公園の施設や自然を繰り返し利用して活動することにより、季節の変化に気付き、友だちと楽しく遊ぶことができるようにする。

はじめての学校《わくわくドキドキ がっこうだいすき!》
1週目のねらい ・学校の施設の様子がわかり、安心して学校生活を送れるようにする。

児童の実態を考え、15分単位の活動を組み合わせていくこと
から始め、徐々に時間を延ばしていきけるように構想した。

基本的に1校時・2校時を固定することにより、子どもたちが
見通しをもてるようにする。

	入学式	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
朝		健康観察				
1		ここにこタイム 歌(音楽)、ゲーム(体育)、読み聞かせ(国語)、ならびかた(学級活動)、ともだちいっぱい(生活)				
2		学級活動 ・トイレの使い方 ・ロッカーや靴箱の場所の確認 ・水道の使用 ・学校の決まり	生活(学校探検) ・保健室 ・職員室	学校探検 ・体育着の着替方法、並び方(体育) ・校庭探検(生活) ・道具の使い方(生活)	生活(学校探検) ・学校全体の探検 ・2校時は、学校の施設を生かして活動し、行かれる場所を増やしていく。	行事 ・身体計測
		学級活動	学級活動	国語	園工	

図1 新しい環境への適応をめざしたスタートカリキュラム

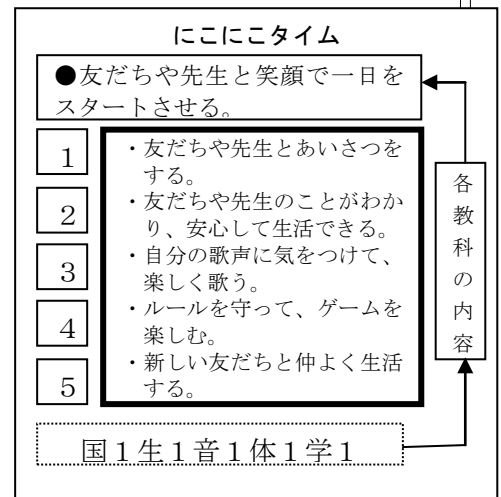


図2 合科的な指導例

②活動と評価の計画

小単元名 (時数)	主な学習活動 (○) 関連的な学習 (※)	評価規準 (評価方法)
	[小単元の目標]遊びを工夫したり、遊びの約束やルールを考えて遊びを創りだしたりして、友だちとかかわりながら、みんなで楽しく遊ぼうとする。	
2 もっと、 公園で遊ぼう (3)	○公園での発見を振り返り、次に遊びたい遊びを考える。 ○もう一度、公園に行く。 ※「ウキウキドキ」(図工) 公園で遊んで心に残ったことを絵にかく。 ※「好きなもの なあに」(国語) 公園で見つけた好きなもの、気に入ったもの、楽しかったことを友だちに知らせる。二人組になって伝え合う。	関①：友達とかかわりながらみんなで楽しく遊ぼうとしている。 (前時の遊びの発表(全員)・話し合いの様子) 思②：遊びを工夫したり、遊びの約束やルールを考えて遊びを創り出したりしている。 (行動観察→問いかけ) ★生活科での振り返りカードは書かない。 公園で遊ぶ活動を図工や国語での題材にする。

③子どもの姿

子どもの意識をつなげるため、公園での「ひと・もの・こと」とのかかわりを中心に、教科の中で付きたい力を明確にしながらか関連的な学習活動を構想した。初めて公園に行く前には、道徳「みんながにこにこ みんなのこうえん」(内容項目4-(1)公德心・規則尊重)や学級活動の「安全な登下校」の学習をした。2回目に行くときには、生活科で、前回の経験をもとに話し合って遊びを決めた。活動後は楽しく遊んだ思いを図工で絵に描いたり、国語の題材として伝え合ったりした。公園や行き帰りの道で、道徳の時間や学級活動の学習が話題になった。スピーチや作文などで自分の体験したことを伝える活動では、いきいきと表現する姿が見られ、生活科での体験活動が国語の言語活動に生かされていた。

単元のまとめ「こうえんアルバムをつくろう」では、生活科の振り返りカード、国語や図工の作品から季節の変化や友だちが増えたことなど、自分の成長を含めて一年間の公園での活動を振り返った。

3 幼小の交流

(1) 互恵性のある交流へ

現在の保育園や幼稚園と小学校との交流は、年数回の行事などで行われ、「交流すること」そのものが目的となっていることが多い。接続を見通した互恵性のある交流へと発展させていくためには、交流の時期や内容の共通理解を図り、双方が明確にねらいをもって教育課程に位置付けていく必要がある。そのためには、交流の年間指導計画を作成すること、事前だけでなく事後の反省や検証を行い、次の活動へと有機的につなげていくことが求められる。

(2) 検証授業「みんな なかよし」

①年間指導計画の見直し

単元のねらいと交流のねらいを明確にするために、保育園との交流を年間指導計画に位置付けた。これまで保育園児と交流する際、1年生にとっても初めての活動で、初対面の

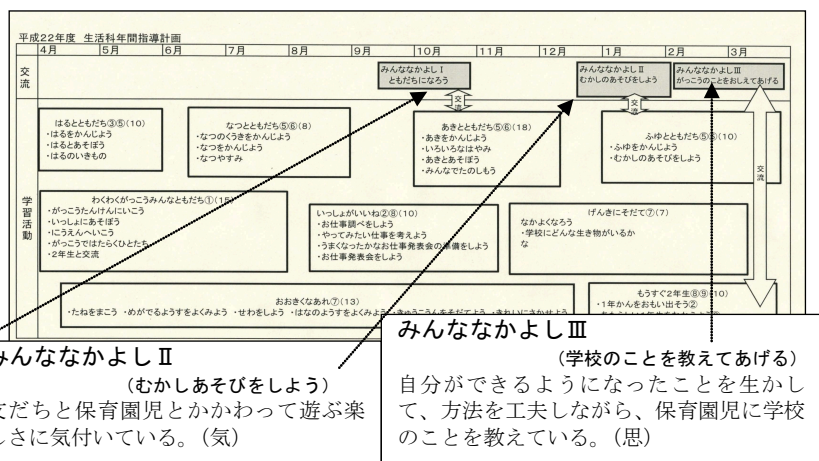


図3 年間指導計画への位置付け

保育園児に対して年長者としての自覚を求めている。1年生では、発達の個人差に配慮する必要がある、交流体験が浅いうちから単元のねらいに加え、年長者としての振る舞いを求めることは妥当ではない。「自分の成長」の内容である3回目の交流で、「保育園児に小学校での生活を伝えることを通して、自分ができるようになったことがわかる。」ことを見通し、1、2回目のねらいを設定した。

②子どもの姿

A児は、1回目の交流では保育園児とかかわれず、友だちと2人で遊んでいたが、「今度は保育園の子と砂場で遊びたい。」と振り返っていたことから、保育園児とのかかわりに意欲がもてたところを見取れた。2回目の交流では、友だちと保育園児と3人で遊び、満足感をもっていた。3回目の交流では、保育園児に鉛筆の持ち方を教えることを提案した。「上手に書けるように、鉛筆をけずっておこう。」と友だちに呼びかけるなど、自分から保育園児を意識して活動することができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究を通して見えてきたこと

公園を中心にした関連的な学習では、身近な自然を観察したり全身で遊びを楽しんだりすることが、言葉や絵などで自然に表現したくなる気持ちにつながった。公園を核に友だちとのかかわりや遊びの広がりを実感し、季節の変化を時間軸に自分の成長を振り返ることができた。

幼小の交流では、交流することが目的になっていた活動を見直し、子どもの意識に沿って活動のねらいを設定したことで、教師が子どもの成長をじっくりと見守り、評価することができた。

生活科は新設された当初から、幼児教育に学ぶことを大切にしてきた。幼児教育との接続の視点から生活科を見直すことは、子どもの思いや願いを生かし、主体的な学習を重視することにつながった。接続期を支える双方の指導者は、相互の教育方法を理解し、見通しをもって指導に当たることが必要であると考えている。

2 今後の課題

スタートカリキュラムについて、作成の視点をもとに、各学校の実態に合わせて実施、検証していきたい。また、1年生だけでなく生活科を中心にした低学年の2年間を視野に入れた接続の在り方について見直していきたい。

最後に研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方」
幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 2010年
「仙台市スタートカリキュラム作成の指針」仙台市スタートカリキュラム検討委員会 2010年
『～保幼小ジョイント期カリキュラム～しっかり学ぶ しながわっこ』品川区 2010年

【指導助言】

須田 泰弘 川崎市立小学校生活科・総合的な学習教育研究会長（川崎市立稲田小学校長）